

個人的「Catch & Release」考

日本ボーイスカウト神奈川連盟湘南地区
渚獲物倶楽部 主宰 増田 多加男

今から3年前「お前は獲ったものは何でも、うまいとか食うためとかと言って持っていく。節操がない。哲学がない。」と釣り仲間と言われ、笑われたことに反発して釣りのHPに寄稿したものが、この文章：個人的「Catch & Release」考でした。

後述の内容は、個人によって見解と判断が異なることを前提として、キャッチ&リリースと食べることの必然について可能性のある様々なケースを想定し自分の考えを整理しておいた当時の原稿に、2003年の現時点でスカウトスピリッツを加味し、少々加筆しました。

当時、自分の考えをまとめた動機は、釣りとが海辺の野営などに行き、「多少小さくても美味しいから、または食べるものが他に無いから。」・・・という理由で獲ってしまった時だとか、周りの人達はリリースしている小さいサイズなのに、私だけキープして干物とか塩焼き・煮物・から揚げにして食べてしまうことへの恥ずかしさと、ある種の罪悪感があったため、このような自分の食べ方と漁を好む自分の性格を客観視し、正当性があり論理性を持っていることを周りの人達に認めてもらいたい気持ちが大きかったことによります。



Catch & Release を初めて知ったときは...

1970年代の中学生の頃、ハワイ・カナダを舞台にしたフィッシングテレビ番組(11PMという番組の1コーナー)で、ブラックマーリン・ブルーマーリン(カジキ)・キングサーモンなどの大きく引きの強烈な魚を釣り上げて記録を競う光景を見た時、リリースということを知りました。

記録対象に満たない魚とか競技種類以外の魚が掛った場合はリリースしたり、1人あたりの制限数以外にはリリースすることが、その釣りのルールでした。現在では、一般的で良く知られていますが、スポーツフィッシング・ゲームフィッシングという言葉もその時に初めて聞きました。

その番組を見るまでは、釣った魚は食べるか、飼うか...が普通だと思っていましたから、「アメリカの金持ちのやる釣りは、余裕がある...スケールがデカイ。」とか「日本人は魚食うがアメリカ人は魚食わないから当然か...」と勝手に思いこんでいました。

当時は、釣り技術と知識が未熟なため魚にお目に掛れず、とにかく釣ることが先で、エサとか、場所とか、道具など.....釣るための方法ばかり考えていて、リリースなんていう余裕のある釣りとは無縁でした。もちろん、新鮮な魚うまい魚を食べることしか考えていませんでした。

当時の私の釣り方は、釣るまでは、狩猟本能に素直に従った生物本来の行動..釣った後は、食べることへの欲求とうまいものを食べたぞっ、という満足感を目的としたものでした。これは、今でもあまり変わっていないように思っています。

< Catch & Release...Case Study >

小学生のころから現在まで、40年に渡る私の個人的な釣り&ワナ・投網などの魚漁経験を基に、リリースする場合について、数パターンのCase Studyと現在の状況などをミックスして考え方をまとめてみました。

CASE 1 全ての水生生物をリリースする

- ・ 魚類は嫌いだか捕まえるのが大好き
- ・ 魚類は好きだが食べるのが嫌い
- ・ 捕獲、レクリエーション、スポーツゲーム、自然への知的チャレンジが目的
- ・ 漁法の実験、訓練、修行
- ・ 自然生態調査研究
- ・ そこにいる生物が何なのか知りたい好奇心旺盛な人達
- ・ 目的なしに本能的に捕まえてしまった

全てリリースする場合は、以上のようなケースが該当しそうです。

全てリリースするなら、最初から獲らなければいいと思いますが、どうでしょうか。

私は、全てリリースする釣りマニアを一人だけ知っていますが、多くはないと思います。

カルムチー
外来魚です



CASE 2 全ての水生生物をリリースしない・できない

- ・ 捕獲したものは何でも全て食べてしまう主義
- ・ 本能的に何でも食べてみようと思ってしまう人達
- ・ 大量捕獲したという満足感、征服感を目的とした人達、
- ・ 自然の恵みを理解していない人達
- ・ 投網、地引網、底引き網などで、根こそぎ漁を志向する人達または専門グループ・船団
- ・ 捕獲したものは全て売ってしまおうという人達
- ・ 生物の扱いが下手で死んでしまいリリースできない
- ・ 知識不足でリリースすることが思いつかない
- ・ リリースということと無縁である、意味を理解していない
- ・ 獲物が何も無い時・・・リリースするものがない

チチブ
リリースした方が良いです

リリースしない場合は、以上のようなケースが該当するのではないのでしょうか。

初めて釣りをした人とか、初心者に多いパターンだと思います。

また、素人・玄人を問わず密漁者もこのタイプでしょう。



CASE 4 リリースしてはいけない.....論争の標的：ブラックバス

ブラックバス・ブルーギル等の外来種の定着による日本在来種の減少、伝統的な漁文化と現在の漁業生活の存続危機が問題となり、この種の特定魚リリース禁止の考えが広まってきたものと捉えています。

本来ならば、リリースの自由は個人の判断であるとは私と考えますが、リリース禁止宣言をしないと魚食外来種が増え過ぎ、その地方環境固有の種が減少してしまい、環境と生態の人為的破壊とその地方独特の文化継承及び伝統漁業、職漁業が成り立たなくなってしまうことが、リリース禁止の諸因と思います。

既に周知のことですが、もともと、キャッチ&リリースを旗印にしたゲームフィッシングの愛好家が外来魚を外部から持ちこんで密かに放流したことが要因とされ、キャッチ&リリースについての典型的な議論に出てくるのはこの種の魚です。

ですから、主に淡水域でのリリースが争論となっており、琵琶湖の固有種減少問題が新聞紙上に出ますが、奥只見をはじめ自然環境の良好な場所でも、この類の問題が顕在化してきているようです。



オオクチバス



オオクチバス



ブルーギル

< 職漁・遊漁と自然環境維持の課題 >

「職漁」は職業として魚漁をすることです。「遊漁」は趣味・遊び等として魚漁をすることです。そして、この二つは自然環境の維持保全・放流・リリースと関わってきています。これは、淡水汽水域(内水面) 海水域(海面・外水面)ともに関わっている課題です。

職漁の問題点は、大量無差別捕獲の乱獲でしょう。資源枯渇に直結することが指摘されています。その対策として底引き網などの大量に根こそぎ獲る方法の規制と、生態研究を基にした資源を育てるため稚魚放流・増殖・養殖・養蓄漁業などが行われているようです。

また、職漁と遊漁の双方に関係することですが、漁業組合による遊漁対象の稚魚放流についても課題が指摘されています。それは、下記のような琵琶湖産アユなどを他地方へ放流した時に起こる「その地方独自の環境固有生態の変化」と言われています。

「陸封された琵琶湖産アユの精子は、天然遡上アユの卵子に受精するが、受精卵は生を受ける事無く死んでしまうため次世代につながらない。このため、現在、数カ所の施設で、海産稚アユを採取・養殖し全国放流を目指している。しかし、今度はこの育てた「海産稚アユ」が琵琶湖周辺の河川に放流されればどうなるか。その先に待つであろう琵琶湖産アユと琵琶湖固有水生生物の被害が予測される。」

「全国に放流されるアユの中で一番大きなシェアを持つ「琵琶湖産稚アユ」の放流と共に全国に広がってしまった魚「混入稚魚」が数種類確認されている。特に最近、繁殖し目立つ存在となった混入稚魚のニゴイ・ハスの食性は嚙猛で肉食性が強く、魚卵、小魚、水棲昆虫等を主食とし、水生生態系に被害を与え、さらにこの魚は経済価値がほとんど無く捕獲もされないため生存領域を広げている。また、他の混入稚魚には密放流されたブラックバス・ブルーギルの子孫たちも含まれており、在来固有魚種の減少を招いている。しかしそれを分け除いてから放流するような対策は、未だなされていないようである。」
(参考資料：T山上氏記述文を参照)

日本産のアユであっても「外来魚」と成りうる可能性があるのではないのでしょうか。しかし、経済面の成果が優先なため「アユ」ということで軽視されているように思います。私見ですが、日本の稚魚放流事業は、自然環境・生物学的には少々ルーズではないだろうかと思っています。



アユ



遊漁の問題点は、海水域(海面・外水面)では大勢の釣り人・多数の遊漁船による大量捕獲とコマセ餌の大量撒きと生活廃水・河川汚濁とが連動した海底のヘドロ化・赤潮青潮・海上汚染の発生だろうと思います。

淡水汽水域（内水面）では前述したようなリリースへの議論の主役＝遊漁対象：ブラックバス等の外来魚放流による在来種の激減とその地方独自の漁業への被害などが第一に挙げられます。…当然、廃棄物投棄・生活廃水・河川汚濁による日本固有の在来水生生物の絶滅と減少が大きな問題であることはいうまでもないでしょう。

そして、川・湖・沼・海などへの一定エリアでの釣り人の集中によって起こる、その場所に生息する魚種生物の減少も課題ですが、禁漁期間と魚漁数の制限、立ち入り禁止・魚漁禁止エリアの設置などの対応策が地元漁業組合によって取られています。

他方では、貴重な環境の中に入って釣りをすることによる渓流域・水源地・湿地帯などの自然環境にある固有生態・植生の破壊なども問題視されています。

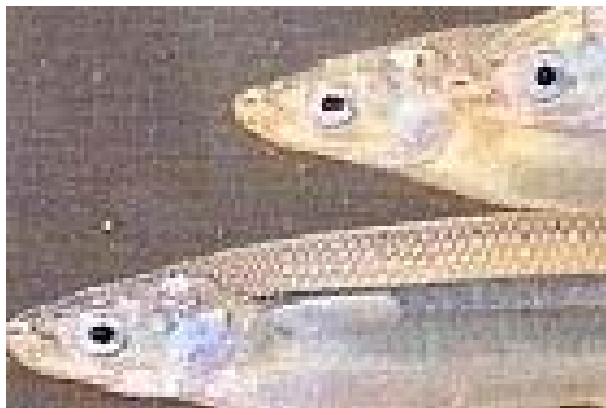
また、一般的に良く知られている「ワカサギ」も放流外来魚です。おいしい魚ですし、人気の釣りの対象魚でもあり市場にも出回る魚です。しかし、この魚も日本の在来固有種に影響を与えているという事も報告されているようです。

このあたりになると、日本の環境に定着し、いつのまにか在来種であるような一般認識が根付いてしまい、前からいたような錯覚があって、何が在来種なのか境界線がわからなくなってきます。似たような例では、ライギョ、アメリカザリガニ、食用カエルなど色々生息しています。

このような外来種と在来種の生存競争の問題は・・・放置すればするほど、時間がたてばたつほど、元気の良い外来種は繁殖し生息域を拡大していきますから、解消する答えは難しくなってきました。どうすればよいのでしょうか。悩ましいところです。

リリースとは無関係ですが、自然環境について別の面から考えてみますと、水域における日本の環境問題は、実は私たちの生活観にも関係していると思います。

日本には、「全てを水に流す」という言葉があるように、水に流すと問題が解消されるような錯覚が常識として心の中に潜んでおり、汚いモノ 不用なモノは川とか海に流してしまい、浄化されきれいになった気持ちになっているのではないのでしょうか。



ペペレイ
アルゼンチンからの外来魚です

< 考察 : Catch & Release と放流 >

前述の Case Study と現在行なわれている放流&リリースの課題を複合的な視点で考察してみました。

漁業魚種育成、環境保全などのための稚魚放流

- ・ 湖沼・川：アユ、トラウト（マス科）サーモン、地方固有メダカなどの各種
 - ・ 汽水・海：タイ類、ソイ、カサゴ、イセエビ、アサリ、シジミなどの各種
- などが、漁業組合等から稚魚放流されています。これらは、新聞・テレビニュースなどのマスコミでも取り上げられています。

スポーツ・ゲームフィッシング・遊漁用の外来魚放流と稚魚放流

漁協が正式放流したものと愛好家が密かに放流したものがあります。湖沼・川で、ブラックバス、ブルーギル・トラウト（マス）類、アユ、ヘラブナなどが知られています。それ以外にも、外来コイ科数種、タイワンドショウ数種など、だれかが勝手に放流したのも相当種生存し繁殖しているようですから、この種類だけではないでしょう。

スポーツ・ゲームフィッシングでリリースされる代表的な魚種

- ・ 湖沼・川：ブラックバス、トラウト（マス）サーモン、ヘラブナなどの各種
 - ・ 汽水・海：スズキ、サーモン、シイラカツオ、カジキマグロなどの各種
- などが、Catch&Release の対象魚として一般的に知られているでしょう。

キャッチ&リリースと放流の目的

「リリースする目的」について考えてみると、次の様なことが言えると思います。

- ・ 魚種を減少させないため、自然環境を悪化させないため
- ・ 趣味としてのゲームフィッシングを楽しむため
- ・ 自分にとって必要がないため

また、幾種の魚類等の「放流の目的」について考えてみると、次のようなものが挙げられます。

- ・ 漁業資源育成・食料確保のため、自然環境維持保全のため
- ・ 趣味としてのゲームフィッシングを楽しむため
- ・ 自分で飼育できない、必要がなくなった（飽きた）ため

リリースと放流：目的が矛盾する問題点

リリースと放流目的の関係を考えると下記のような矛盾する問題に気づきます。

漁業資源育成・自然環境維持のための<稚魚放流>にならない放流とリリース

目的達成のために放流された稚魚を「大量に食べてしまう魚の放流とリリース」により資源育成・環境維持が成り立たない

その環境の自然界にいなかったもの<外来魚>の放流とリリース

生態系が崩れてしまい古くから進化してきた生物が著しく減少または人為的に変化してしまう。

< キャッチ&リリース：私の考え >

個人的な視点で考察した結果と生物生態的に現在広言されている内容を考慮して、キャッチ&リリースに対しての私の考え方を下記に結論としてまとめてみました。

- ・ キャッチする（釣る&獲る）ことは、食物連鎖上に存在している生物=人間として「食べ物への狩猟・捕獲本能と食欲に素直に従った先祖から伝わる遺伝子情報」による行動・嗜好である。
それ故、善か悪かの判断が困難であり、キャッチする（釣る・獲る）ことへの是非は、誰にも問うことができない課題であると考えます。
- ・ 私の行動原理は、狩猟・捕獲本能と食欲に素直に従った遺伝子の指令を行動の拠り所としているため、魚類狩猟の方法は生命体をもてあそばさような指向ではなく、食べる事=個人的な殺生による供養・成仏を伴った...無駄な殺生はしない仏教思想・精神を基盤においたものである。

このため、私のキャッチは、「自然にあるものをより自然に食べる」ことを第一の目的とした...生き物としての純粋な行為そのものである。

...当然、私はスローフードの思想にも賛同し実践している。

- ・ キャッチする生命体は、自分あるいは家族・仲間が食べられる量を限度として狩猟・捕獲する。また、体に良いものを食べたい欲求とうまいものを食ったぞっという満足感が結果として得られることを第2の目的としたものでもある。
- ・ この第2の目的を達成するために、様々な生き物（素材）の生態と生息環境、素材への知識と目利き選択、料理の技量と方法アイデア、狩猟テクニックなどについて、できるかぎりであるが、学習と研鑽に努めている。
また、学習と研鑽は、様々な種類の生物が自然に行っているものであり、全ての生物は本能による行動と観察・判断・選択・狩猟能力などを、それぞれの成長過程で段階的に学習しているといわれている。



クロダイ

ヒラメ



- ・ 私の個人的な論理とその実践による「乱獲をしない・生命をもてあそばない」魚漁スタイルにおいて、私がリリースする場合は下記のケースである。

- * 食べられないもの、食べたくないもの、食べるとまずいもの
- * 食べる量以上獲ってしまった時
- * 獲ってはいけないものが偶然かった時

また...

- * 希少生物の生息する場所では狩漁はしない
- * 貴重な自然環境の場所には足を踏み入れない
- * 稚魚放流した場所では狩漁はしない
- * 産卵期の獲物をターゲットにしない、雌はできるだけリリースする
- * 環境に対する高い見識と環境保全への心構えを持つ
- * 職漁・遊漁の知識、放流事業への正しい認識を持つ

これらの事柄を「自らの戒め」としている。表現を単純にすれば、

- * 生き物の命を自分だけの遊びの対象としたキャッチ&リリースを旗印にしているスポーツ&ゲームフィッシングは行わないことが、私のスタイルである。
- * 生き物をもてあそぶ行為を否定し、獲ったものは必ず食べるということが、私の魚類狩漁指針であり私の哲学である。
- * 例えば、ヘミングウェイの「老人と海」に表現される = カジキとサメと人間のやりとりと関係を私の狩漁スタイル..理想の姿として追い求めていきたいと考えている。

以上が、私のキャッチ&リリースについての考え方です。



イシダイ
タコ



私は、Catch&Eat を目的としています。...そして食べる以外をRelease することにしていますが、食べることを目的としないCatch&Release スタイルの人達もいます。私はその人達を批判したり否定しているわけではありません。キャッチする(釣る・獲る)行為には、必ずされる側の命が存在しているわけですから、その命をできるだけ尊重していくことが大切であると考えています。

そのためには、第一に「キャッチする生物が生息する自然環境と生態への知識と理解、自然環境維持・改善への心構えと努力が必要」であろうと思います。

何故ならば、生物の名前や正体を知らなければ、リリースするべきかどうかの判断ができませんし、不運な時は毒針にさされたり、毒にあたりたりしてしまいます。生息環境の特性や生態を知らなければ..(たまたま釣れたり勝手に魚がついてきた場合を除けば)..狙い通りのおいしい獲物を的確に<釣る・獲る>ことが難しいと思います。また、生息環境の悪化に無関心であれば、いずれ生き物はなくなってしまい<釣る・獲る>こともできなくなってしまいます。

私は、多様な生物の自然生態・生息空間への理解と配慮および、より良い自然環境を次世代に残していくような視点が多くの人達に共有されることの重要性について、Catch&Eat &Release の考察を通して再認識しました。この認識を忘れずに、今後も釣り竿を右手に持ち、ワナを仕掛け、自然の恵みを享受していきたいと思っています。

補足資料 <実験：魚食系魚の飼育>

ブラックバス・ブルーギル・レインボートラウト・ヤマメ・ウナギ

(* 実験は時期と水槽を変えて別々に行ないました)

ブラックバスとブルーギル(1997年~1998年)

藤沢の慶応大学の沼で偶然捕獲した8cm程のブラックバスとブルーギルを家の水槽で飼育してみました。

ブラックバスは、とにかく獰猛で、他の魚を襲います。メダカ・金魚はすぐに食べられてしまいました。餌を与えるのに大変で困りましたので、魚系ペットショップにプレゼントしました。2度と飼う気持ちにはなれません。おそらく在来種の魚を根こそぎ食うタイプでしょう。

ブルーギルは、食欲旺盛で勢いがあります。稚魚は食べるようですが、2cmぐらいの魚は襲いませんでした。しかし、他の魚に体当たりしながら追いやり大量に餌を食べます。こいつは繁殖力が強いタイプ：閉鎖的な淡水エリアに在来種の魚を押しつけて勢力拡大する魚だろうと思いました。

この2種の間では共存可能かもしれませんが。ブルーギルの大繁殖 ブラックバスの餌供給源 ブラックバスの増加・むやみやたらと周りの魚を食いまくる 更に負けまいとブルーギルは繁殖をパワーアップする 結果、日本在来種は片隅でコソコソと生存するしかない・・・という流れではないかと私は想像しています。



レインボートラウト(虹鱒)とヤマメ(1998年~1999年)

外来種であるレインボー8cmと在来種であるヤマメ9cmは、山梨の溪流で捕獲しました。レインボーは日本の自然環境でも今まで敵視されていないようです。この2種を飼ってみると他の魚との同居は可能でした。

しかし、長期キャンプなどで餌を与えない状態だとメダカがいなくなっていました。どうも、ヤマメとレインボーが食ったようです。赤ムシなどの餌があれば無理して襲わないようです。20cmを超えたならばわかりませんが・・・12cmになるまで飼いました。これも餌が大変になり魚系ペットショップにプレゼントしました。



ウナギ(1999年~2000年)

ウナギ20cmは相模川で捕獲しました。飼ってみると大変よくなついてきます。餌のサインを送ると浮上して手から餌を食べます。ただ単に貪欲な性格ゆえでしょう。

大喰らいとはコイツを指すと思ってください。何でも食べます。

まずはタニシが空になっていきました。次に金魚の稚魚がいなくなりました。メダカはチビ金魚に比べて逃げ足が速いのか助かっていました。その次には、ドジョウが傷だらけになって弱ってフラツイテいました。潜っていたのが水中に出ています。そしてドジョウの数が減っていきました。

ウナギはどんどん大きくなって35cmくらいになっていました。この時に、ウナギがドジョウに手を出し始めたことに初めて気が付きました。もう手に負えず、ウナギには相模川に返っていただきました。

ウナギは、手っ取り早く無駄な努力なしに食べそうなモノから何でも餌にしていくようです。成育が速く栄養価が高い理由もこの辺りにありそうです。



・・・今、私の家の水槽にはおとなしい魚だけが平穩に暮らしています。